
物生の輪廻

ももも。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物生の輪廻

【Nコード】

N4776Q

【作者名】

ももも。

【あらすじ】

幸せの立ち位置は ささやかなモノから生まれます――。
死んでしまったヒトが モノとして黄泉がえる物語です。そこに待っている懐かしい世界の日常が、幸せでもあり、不幸でもあり、切ない形で、優しく 現われていきます。この小説は、主人公によって舞台が違います。現代や、魔法世界、様々な世界観の 読み切りショート小説です。

シャープペンシル 1

怖い夢を見た。真っ赤な炎が噴流し、踊り子のように激しくのたうち 抱擁される夢だった。服は跡形もなく、何処で切り裂いたのか、体は血で濡れている。露出した肌から焦げた匂いがする。瞼は焼きついて、動かす力すら残っていない。ぼんやりとした煉獄だった。

そして、今は真っ暗な世界に佇んでいる。音や光。香りすら飲み込まれているような何もない世界だ。そろそろ、夢から覚めたいと思うのだが、まったく目が覚める気配がない。悪夢を見るほどに疲れていたのだから当然かもしれない。

「当然では ありませんよ」

突然に声を掛けられて驚いて飛びのいた。即座に声の方向へ振り返ってみる。

自分の胸程度の身長ショートカットの女性が立っていた。紫を基調としたワンピースのような服を着ていて、手には青い板切れを持っている。その女性の眼光は全ての生物を戦慄させるような威圧感があった。

「何を黙ってこちらを見ているのですか。そのような行動は、人によつては不快に感じられる場合もあるでしょう。見直すべきだと思いますよ」

「すみません。ちょっと、驚いたもので」

「すぐに謝罪をする癖でしょうか。あまり誉められた行為ではありませんね。でなければ、あらぬ誤解を受けてしまうものです。本人だけならまだしも、人は支えあって生きていくものです。つまり、他人にも迷惑を被ることが割合に多いものです。例えば、今の謝罪

であなたが誤解を受けたとしたら、きっとあなたの人間性を疑われるでしょう。すると、あなたの周囲にいる人間の人間性も必然的に怪しく見えてくるものなのです」

どうしてだろう。良いことを言っているのに、騒音にしか聞こえない気がした。独特の責めるような口調が原因だろうか。正論は言っているのに、反論したい言葉を飲み込んで相槌を打った。

「…… はい」

「さて、どうして私がここにいるか分かりますか」

「いいえ。さっぱりです」

「おや。もしかして、死んだことに 気がついていないのかしら」

目に見えない金槌に、心を殴られたかのような衝撃を受けた。思い出した。この暗がりの世界に来る前の自分は、買い物をしていて、火事に遭ってしまい逃げ遅れたのだった。

「ええ。思い出しました」

「そうですね。ならば、話は早いですね。あなたは死にました。そして、私は――」

「死神でしょうか」

「それは、違います。あなたは既に死神に送られて、ここで 私を待っていたのですよ。ところで、話の途中で割り込んで入ることはマナー違反です。あなたの心理状態を 私が理解していたから怒りませんでした。話を割り込む事は 基本的には鼻につきますよ」

「…… いえ。申し訳ありません。予想もしていない状態なので、パニックになっていたようですね」

「そうですね。さて、私の仕事をするとしましょうか」

手に持っていた青い板切れを振る。その板切れは徐々に色が変わ

つて灰色になった。そして、懷から大きめの手鏡を取り出して、それを 目を細めて真剣な眼差しで見つめた。

「灰色ですか。なるほど、鏡にも…… そうですね」

「すみません。何ですか。それは」

「こちらの棒は読悟棒と呼ばれています。あなたの生力を読み込むことができます。この手鏡は、あなたの人生を映し出す鏡です。浄玻璃の鏡と言えば分かり易いでしょうか」

「ということは、黒でも白でもないんですね」

「罪のことですか？ ならば、問題ありません。仮に人間に極悪人と呼ばれていたとしても、懸命に生きたのなら それは誇るべきことです。当然のことですが、地球と人間の価値観は違いますよ」

「地球と、人間が違うってどんな意味ですか」

「ああ、そうだ。その説明を忘れていたわね。そうね。あなたは地球は生きていると思いますか」

「生命活動をしているなら生きてるんじゃないでしょうか。呼吸やら何やらをしていたら」

「ちよつと、惜しいわね。正解を先に述べると、地球は生きています。そして、あなたは今。地球に裁かれています」

「そうなんですか！ じゃあ、あなたは地球ですか！？」

「いいえ、違います。私の立ち位置は、本来は人間に干渉することができない変わった生き物というところかしら。あなたとは違う次元の存在だから人間を裁くことが可能なのです。地球は生きていて人間は地球に依存して生活しています。そして、地球は生活している生き物の為へのアイデンティティによって存在が成り立っています。しかし、主役は地球本人ですからね。地球に害を及ぼすならフィルターをかけて除外する。それが私たちの役割なのです。さて、話を戻しましょう。簡単に述べると灰色だから合格よ」

「よくわからないけれども、ありがとうございます」

「ええ、その応答は灰色ですね。誰とでもペースを合わせることが

できて、嫌われることが少ない。ただ、口が回るので二枚舌に見えるてしまうことがあり 逆に悪く見えるのです」

「はい。分かりました」

「それと、あなたは少し他人に説教を課し過ぎます。他人よりもまず己の未熟さを知るべきです」

「……………」

「どうしましたか、腑に落ちないような表情をして」

「い、いいえ！ なんでもないです」

「そうですか。言いたいことを言えないのも灰色ですね。さて、質問はありますか」

ここで質問を逃したら、文字通りに一生 質問ができないだろう。今の状態の手がかりの欠片が欲しい。質問したいことを頭の中で纏める。

「それで、合格したらどうなるのですか？」

「褒美が与えられます。人間は知性を重んじる傾向のある生き物です。故に本来は得られない知識や経験を得ることができます。知識は あなた達の最高のご馳走です。味わって楽しみなさい」

「分かりました。 では、どのような 知識や経験でしょうか」

「今まで、人間としてモノを使う立場でいたので、モノとして使われる立場になりなさい。山を観察する時は、実際に近くで見ること大切ですが、遠くから眺めることも概要を把握するには必要です。使われる立場となり、外からの人間を理解するのです」

「どんな、モノでしょうか」

「それは、あなたが決めることができます。ここで学んだ事は魂へ直接に刻みこまれる為に、次の輪廻へ巡り転生をした時に無意識下では記憶をしています。下賤な者は排除をし、優秀な者をさらなる高みへ輪廻を廻る。地球。輪廻。伝承。世界は廻って動いてるので。 さあ。よく考えて学びなさい」

シャープペンシル 2

地球の管理人に出会い、モノへ黄泉がえった。俺はシャープペンシルとなつて自分の家へ帰つてきた。辺りを見回してみる。部屋の中は、プロの犯行と確信ができるほどに乱雑していた。ある程度に散らかすと、通り道やよく使うものなどの配置のバランスが必要となるが、絶妙な調和が繰り広げられている。

その部屋の中に、石のように黙って ひたむきに机に向かっている女性がいる。

（アイツ。頑張ってるんだな）

彼女は自分の妹だ。部屋が乱雑しているのは、丁度に大学受験の最中だからだ。シャープペンシルになつた理由は、兄として何もしてあげられなかった事の赦免の部分が大きい。思春期を境に距離の取り方が分からなくなつて、そのまま 遠いような近いような存在になつてしまった。特にケンカもせず、かと言って一緒に遊んだりもしない。もしかしたら、アパートの隣人のような関係と言つた方が似ているのかもしれない。

「はぁ…… この問題 分かんない。数学なんて滅ばいいと思う。私が偉くなつたら消そう。よし、気分転換に国語でもやろうかな」

物騒なことを呟きつつ国語の教材を探す。そして、手に持っていた赤ペンをペン立てに入れて自分を取り出した。

「よし。今日は、漢字をやろうかな」

スラスラと漢字の問題を解いていく。その姿を頼もしく思いつつ、

ふと寂しくなる。別にシャープペンシルになって試験を助けるつもりなど毛頭に無かった。しかし、自分がいなくなっても悠々と世界が回り続けていることはどこか切ない。

「何だっけ？ 教室に ドセイ が響き渡る ……」

教室に 土星 が響き渡った。
大丈夫なのだろうか。

シャープペンシルに黄泉がえって数日が経った。生きていた時は気がつかなかったのだが、アイツの集中力は凄まじいものだった。集中した時は眼光が鋭くなり、凜とした表情となる。最高に集中した時は、シャープペンシルの自分ですら、時間が止まったと錯覚するほどの気迫を醸し出すのだ。

カリカリと勉強している最中に部屋がノックされた。

「ちょっと、いい？」

「どうしたの、お母さん」

「お兄ちゃん、の部屋を片付けようと思うの」

「そう。今、勉強中だから 後でもいいよね」

再び机に向かった。すると、人間ではないのに、背中がピリピリとするような緊張が走った。

「いいかげんにしなさい！ 葬式の時もそうだったでしょ！ 勉強ばかりして！」

「今は、受験なの！ それは、お母さんが一番分かっているでしょ！」

「受験なんて、そんな問題じゃないの！！」

「私の人生がかかっているんだよ！ そんな問題　なんかで片付けないでよ！！」

空気が震えるほどに怒声が響き渡り、数十分間も続いた大口論となった。最終的には、お母さんが一人だけで俺の部屋を片付けることになった。そして、アイツは勉強を続ける。

確かに、受験には多少なりとも人生がかかっている。特に女性には、一年の差でも切実なのかもしれない。だけれども、死んでしまった自分としては、もう少し悲しんだり、敬ったりしてほしいものだ。

母親を含めた周りのモノ全てを拒絶するように、黙々と勉強に集中をする。しかし、それも長くは続かなかったようで、ため息と共に 教科書を苛立ちごと放り投げた。

「分らず屋っ！ 受験の失敗をお兄ちゃんの所為にしたら、成仏できないでしょ……っ！」

分らず屋だったのは自分の方だったようだ。自分がいなくても世界が変わらずに動いていると思っていたが、しっかりと他人に影響を与えていた。妹と母の摩擦がまさにそうだ。

「悲しくないなんてないよ。家族だもん。だから、頑張らないといけないから………」

嗚咽交じりの苦しげな声で呟いた。

誰かが、死んだことに純粹になりすぎると、今のように軋轢が起きてしまう。それをどうやって、避けたり理解し合うかを考えて生きていくのが大人の世界だ。

だけれども、それを分かっている上で母親を拒絶した。ここは意地を張って 立ち向かうべきだと、覚悟をしていたのだ。いつの間にか、自分よりも大人になっていたのかもしれない。

シャープペンシル 3

時刻は朝の六時だ。けたたましい音の目覚まし時計が鳴り響く。朝から騒々しい時計を瞳を開けずに手の感覚だけで止めた。すると、起きることを忘れてるように そのままじっと動かなくなる。

（相変わらずに 朝が苦手なんだな）

二度寝から小一時間程度が経つと朝日が鮮烈に襲いかかった。まばゆい情熱的な朝日を 冷めた目で拒絶する。虚ろな瞳で、カーテン越しの太陽を睨みつけていた。

起きてすぐに勉強開始する。今日はセンター試験の二か月前だ。試験は九時頃のスタートなので、早めに起きて頭を回転させる練習である。起きてから三時間が一番に活動できる時間らしいので、それに合わせての早朝の起床だ。

「…… ガムでも買えばよかった」

今までに聞いたことがないような低いアルトの声が聞こえた。あの意味 相当に参っているようだ。

（ここ最近では修行僧侶のような修学生活ばかりだからな）

週に三日の塾と、週一日の家庭教師。学校でも特別授業のやるほどこに気合が入っている学校だ。一日の拘束時間がほぼ勉強につき込まれている。

（風邪とか ひかないようにな）

「あー、でもコンビニ行くのも寒いから面倒くさいからどうしよう」

ドア越しからの曇った母親の声が聞こえた。ご飯を食べて学校に行く準備をしなければならないのだが、体調は大丈夫だろうかと少し心配になった。

バスに揺られながら単語帳を無表情でめくっていく。少しだけ端が欠けた単語帳は、積み上げてきた努力の証を示しているように見えた。その単語帳に赤ペンで新しく何かを書き足していく。

停留所を何力所か通り過ぎた所でふと顔を見上げた。こちらを認めて一人の女性が手を振っている。同じ制服を着ているので、おそらく友達なのだろう。満面の笑みで、元気を振りまく女性が隣に座った。

「おはよー！」

「おはよう。今日も元気だね」

「まあね。今回の模試の結果が良くてね！ 見てみる？」

「ちよつと 気になるじゃん。いいの？」

「大丈夫だよ。ほら、コレだよ」

「わあ！ あと十二点でB判定だよ！ もう少しだったねー！」

「そーだよ！ そーだよ！！ ホントに もう 運の問題でしょ
ここまで来れば！」

「凄いんだね。頑張ったね!!」

「頑張ったのは私じゃなくて財布だけれどもね。電子辞書を買ったら成績が上がったんだ」

電子辞書は、以前の受験の時に お世話になった。何よりも時間がかからなくて楽なのだ。辞典を使うならば、まず辞典を本棚から引っ張り出して単語をA、B、C、Dと探していく。これだけで英語が苦手な自分は非常に萎えた。そこで活躍したのは電子辞書だった。金額にして七千円程度だ。当時の自分にとっては高い買い物であったが、一緒に広辞苑も入っていて国語でも役に立つ最高の相棒だった。

「ほら、凄く便利なんだよ。お値段なんと 六千円ですっ!!」

「へえ。電子辞書も良いかもしれないね」

影から電子辞書を盗み見る。すると信じられないような光景が広がっていた。

まず、液晶の綺麗さだ。カクカクした初代のマリオのような歪さは全くない。それはまだ分かる。自分の時代でも四万円の辞書が、これと同じ程度の画質だったのだから、きっと数年が経てば変わるだろう。一番特筆すべきは辞典の多さだ。広辞苑はもちろんのこと、英和、和英、英英辞典、古語単語辞典、世界地理辞典、世界史有名人逆引き辞典。まさに、受験に必要な全ての辞典を網羅していた。友達が得意げに「次のページ」のボタンを押す。手書き入力、音声読み込み。挙句の果てには、家庭の医学や、ワイン コンパニオンまで入っていた。 啞然としすぎて言葉を失った。

(ついに、世代のギャップを感じる年齢になったのか……)

バスが高校の停留所に止まる。世界を白く染める太陽と、透き通

った空を眺めつつ、すっかりと浦島太郎気分を味わいながら一緒に学校へ向かった。

シャープペンシル 4

体が凍りついているのではないかと錯覚するほどに空気が冷たく重たい。今日はセンター試験の当日だ。自分もセンター試験を受けたことがあるが、緊張していたせいかこの空気の重さを逆に感じていなかったのだろう。しかし、どうやら自分よりも繊細なようので、バスから降りた途端に殺伐とした空気にたじろいでいた。

（大丈夫。今まで精一杯にやってきたんだから、結果は必ずついてくる。がんばれよ）

筆箱の中からエールを送るが、それが届いている様子もなく言葉を失ったかのように黙っているままで歩き続けている。

そのまま歩いていると、親しげに近づいてくる人影が見受けられた。どうやら友達のようなのだ。緊張するねと はにかんだ笑顔で会話をしている。心理学的には口に出すと心底から自覚してしまうので、そんな会話は止めるんだ と思ったが、少しづつ微笑が柔らくなっている様子を見て、それは間違いだったと気がついた。

（よし！いいぞ…… あー、えーと、友達Aさん 良くやった！）

自分が受験しているのではないのだが、多少は緊張しているのかもしれない。少なくとも変なことを言う程度には緊張していたようだ。

友達Aさんと別れて受験する教室に入る。周りを見回してみるが他に友達はいなようで悲しそうな表情を浮かべた。

（問題はないよ。俺が憑いている！ いつも通りにやれば 十分すぎるくらいだから、な）

どこかの予備校の先生からもらった「絶対合格選ばれし受験生の漢字帳」に穴があくほどに真剣に見つめる。そろそろ、国語の試験が始まる。

（ヘイボンな生活…… 平凡。うん。正解だね。イダイな人物偉大だよね。ああっ！！「しんによう」じゃない！「にんべん」だ！）

（ああ もう。やっぱり古典はマズっている。苦手も俺に似ている。そうそう、漢文は楽だよな）

試験が終わり一息をつく。ここから見える範囲では及第点は採れた様子だ。緊張していてこの点数は中々に上出来だろう。次の科目は何だろうか。すると、ノートを取り出した。おそらく数学だろう。苦手意識があるみたいだけれども大丈夫だろうか。

周囲には、実際に受験して受験生の全員が緊張が解けたからか談笑をしている人が何人かいる。

甘いな。ヤクルトに餡子と、ココアと、いちごオレを入れるくらい甘い。試験の寸前だからこそ 追いつめられて記憶に定着しやすい。一夜づけ効果のようなものだ。それを分かっているのか、我が妹は真剣な眼差しで方程式の解き方ノートを見つめていた。

すると、誰かがこちらへ近づいてきた。友達Aさんだ。それっ言ってやれ！ 君とは違うのだ。黙って勉強するのが君の為だとツッ！！

しかし、友達と談笑を始めた。でも、緊張をほぐすことによつて、今までの実力が発揮しやすくなるのだから良いことかもしれない。しっかりと、勉強したのだから確認なんて簡易で十分だからだ。

友達が受験教室に戻り、再びにノートを見つめる。少し時間が経って試験官が来て試験が始まった。

（方程式は、あれだけ頑張ったのだから大丈夫だな。えっ！？二次関数を読まないで全部パスした！？ 初めから捨ててたのか）

（そうそう、 $\sin$ 、 $\cos$ 、 $\tan$ は忘れそうな数値は、メモをしてから計算する。計算していたら頭が茹って、忘れちゃうからね。余弦定理、正弦定理も大丈夫。確率は目新しい問題だね。でも、同じような計算を解くだけだから計算ミスさえしなければ、よし大丈夫そうだな）

計算用紙と試験を見比べて見直しをする。数ヶ所が直した後に問題の二次関数に戻った。すぐにパスしてしまったので問題を全く見ていない。今回はどんな問題が出題されたのだろうか。

（えーと、頂点の座標を解くやつだな。X軸に接するグラフの条件、区間で最小値を考える。あれ？ 軸の位置の所為で、場合分けの誘導があるかな。誘導以外は、いつもやってる基本的な問題じゃないか）

ホッと胸を撫で下ろす。もとい、胸どころか体が無いけれども。これなら、よほど緊張していない限りに正答できる。

「うわぁ。まずった」

小さく呟いた言葉を聴いて見上げてみる。まるで、拷問に耐えているかのように顔を歪ませていた。

（大丈夫！ 大丈夫！！ 大丈夫！！！！ 諦めるな！ あれだけ頑

張ってきたんだ！やればできるから！！）

祈りが通じたのかハツとした表情になり、慌ただしく書き始めた。

（よしっ！！　それが解けたら、連鎖的に解るはず。　もう少しだ！　頑張れ！！）

結局は最後まで解くことができなかったが、半分までは解けた。
今日の試験はこれで終わりだ。ほころんだ表情で試験会場を後にした様子を　筆箱から覗くことができた。

シャープペンシル 5 『最終章』

激動のセンター試験も今日は最終日だ。世界史と化学がある。中間日の英語と地理は余裕の一言だった。何しろ 兄妹そろつての得意分野だ。「暗い部屋だったので電気でも点ける」くらいに簡単な様子だった。外からでも安心して見ることができた。むしろ、OBになった自分よりも知識がある為に、こちらが勉強させてもらったようなものだ。見ているこちらも清々しい回答であった。

思いを馳せている間に試験官がやって来た。これから世界史が始まる。

（ここは少しだけ覚えてる。乾隆帝の清朝に、スレイマンのオスマン帝国だ。十九世紀から二十世紀前半のアメリカ合衆国もあるのかげえ！ オスマン帝国が何処を侵略したか だって！？ あれ、スラ解いてる。そこなのか）

（そこは…… そう、あつたよな！ ナポレオンで二月革命だったしな。そうそう、ロシア革命からソヴェート連邦の成立まではよく勉強してたから問題無いな。二十世紀前半の中国は…… 中国同盟会の事か。これも良く出てたな）

少し危なげな場面もあつたが、ほとんどを滞りなく回答することができた。次は化学だ。「デラックス・センター化学 大辞典」を片手に呟きながら必死に頭に叩き込む。化学は苦手だったはずだ。何か嫌な胸騒ぎがする。ぶかぶかな靴を履いているような、落ち着かない気持ちになる。センター試験で一番に不安な化学がついに始まった。

（その原子量は希ガスだろ！？ もう ちょっとだ！ そこさえ気

がつけば半分は解ける！ ああ、分からないから次の問題に行ったか。 はあ…… 電気分解は基本だろう。 うわあ、ここから見ただけでも半分すら間違えている……………)

見るに見られないような結果になってしまった。今は精魂尽き果てて、落ち切った砂時計のように ぼうっとしている。

少し時間が経ち友達がやって来た。それに気がついて面を食らった表情になり、慌ただしく筆記用具を片付け始めた。

(あれ？ 俺はまだ筆箱に帰っていないんだけど！ おい！ ちょっと！ 忘れてるぞ！！ 待てッ！)

必死の声は届かずにポツリと試験会場に残されてしまった。そして、試験官に拾われて 忘れ物置き場へ無造作に投げ捨てられた。

(さすがに、ここに捨てられたら無理だよな……………)

走馬灯のようにシャープペンシルになった時のことを思い出す。家族はちゃんと生きていて、意見はぶつかったりしていたけれども仲良くやっている。そして、なによりも 自分がいなくても大丈夫だったことだ。これは切ない反面に、人間は強いんだと分かり嬉しくもある。本音を言う最後まで見守っていたかった。更に欲を言うとうと大学まで見ていたかったけれども、これで良かったかもしれない。とにかく、みんなが生きていればいいのだ。

あれから、小一時間程度が経った気がする。これから始まる忘れ物生活に思いを馳せながら、忘れ物箱からの景色を見渡した。忘れ物箱は大雑把に事務室の隅に置いてある。事務には知っている人が一人もいない。なんだか 非常に暇だった。

「すみません。忘れ物はありませんでしたか!？」

聞き覚えのある声が聞こえた。間違いない。迎えに来てくれたんだ!!

(ここにいるぞ！ 俺はここにいるぞ!!)

必死に念じる。人の良さそうな顔のおじさんが、忘れ物箱を持ってきてくれた。

(はやく！ こっちだよ！ 右じゃない！ いや、そっちから見て右側だから合ってるのか!？ 右だぞ！ 右側にいるぞ！ そう、そこから上だ！ 上っ!!)

俺を見つけて花が咲いたような笑顔になる。そっと、俺を持ち上げる。

その時、人の良さそうなおじさんが、別の事務の人に呼ばれてそちらを振り向く。振り向いた拍子に忘れ物箱が俺とぶつかった。

「あつ、ごめん」

「あ……」

(痛ッッッ!!)

足が欠けた感触が体に轟いた。シャープペンシルが欠けてしまった。

欠けた部分から力が抜けていくような感覚に陥る。魂が抜けているのだろうか。もう、生きていられないんだな。そう悟った。でも、そんなに長くの間 生きている世界に居るのも悪い気がする。これ

で良かったのかもしれない。でも、戻ってきてくれた時は嬉しかったな。

来世でも、ちゃんと覚えていられるかな。ふたりで頑張った思い出を 忘れたくないから――。

シャープペンシル 5 『最終章』（後書き）

End

第 1

私はなんて幸せなだろう。私は魔法使いの使い魔として召喚された悪魔だ。私を召喚した当初のご主人様は魔力が弱く、私のような弱い小悪魔を呼び出してしまい残念がっていた。

悪魔の世界は基本的に弱肉強食の世界だ。おそらく、次の召喚の生け贄になると覚悟をしていたが、私を殺さずに召使いとして働かせて下さった。そんな、ご主人様は今や立派な大魔導師となった。大成した姿を私に見せて下さっただけでなく、私を命を惜しんで送って頂いたのだ。

その私は、薄暗い虚無の揺り籠の中で転生を待っている。すると、自分よりも一回り小さい程度の身長の子の女性がやって来た。紫と緑を基調としたワンピースのような独特の服を着ていて、手には青い板を持っている。その女性からの眼光は全てを飲み込むような威圧感が含まれていた。

「ふむ。あなたは優秀ですね。やはり、小悪魔でも時間をかけて育てれば魔王程度の知性を持つんですね」

「はい。ありがとうございます」

間接的にご主人様を褒めていただいて嬉しく思いつつ、この人は誰だろうと考える。ご主人様から見せて戴いた本を思い返してみる。手に持った青い板を見てふと思いついた。

「世界の管理人さんですか。本当にいたのですね」

「ええ、そうです。話が早いと楽ですね。では、あなたの色を見させてもらいますね」

手に持っていた青い板を振る。徐々に色が変わって白色になった。そして、懷から手鏡を取り出してそれを　凜とした表情で見つめた。

「なるほど。あなたは、白ですね」

「あの、悪魔なのに　白で良いのでしょうか？」

「まず、はじめに。悪魔と呼ばれようが、天使と呼ばれようが、懸命に生きたのならそれは正しいことです。言わずもがな、地球と人間の価値観は違いますよ。しかし、白はあまり良い色ではありませんね。白とは、全ての色に染まることができる色です。幼少期の白ならば無垢の色ですが、大人の白は別の意味合いがあります。それは、誰かに染まりやすい体質の生き方を表します。他に合わせることは良いことですが、自分が無い事はあまり誉められたことではありません。そして――」

この人は説教くさいというか、おしゃべり好きなのかもしれない。話を理解する前に次の話題を並べている。案外と人間関係で苦労しそうなタイプかもしれない。

「――　つまり、何かをやりとげるまでは真剣に行いますが、やりとげた後は完全燃焼したような真っ白な魂になるでしょうね」

大切なことを言っていた気がしたが、右から左へ聞き流す。このタイプの人は、相手が不本意でも、ワザとでも　聞き流されることが多いから、要所を本人から聞きなおしても怒らないはずだ。

「申し訳ありません。ここに来ただけでも困惑しているのに、沢山の御忠告を頂いても全てを覚えかねます」

「ああ、ごめんなさいね。そうね。まとめると、顔を伺い過ぎに尽きます。そして、それを解つてしまおうと相手に合わせてしまおう。」

もう少し自分を大切にしなさいって意味ね」

「はい。御忠告ありがとうございます」

「しかし、注意したのはそれだけではありませんよ。そして、今の応答の事でもあるのですが。まあ、良いでしょう。さて、白だから合格よ」

どうやら、小言を回避できたみたいだ。下手な聞き方をしたら、そら恐ろしい事になっていたかもしれない。

「ありがとうございます」

二重の意味で丁寧に感謝をして頭を下げる。世界に管理人は、満足そうに頷いてくれた。

「さて、褒美が与えられます。あなたにとっての褒美は知性のようですね。ならば、本来は得られない知識を与えましょう。さあ、知識は あなた達の最高のご馳走です。味わって楽しみなさい」

「どのような 知識でしょうか」

「知性のある生き物は モノを使います。つまり、モノとして使われる立場になりなさい。山を観察する時は、実際に近くで見ることでも大切ですが、遠くから眺めることも概要を把握するには必要です。使われる立場となり、外側の世界を理解するのです」

「えーと、初めから使われる立場でしたけれども……」

「世界へ行けば解りますよ。さあ、選びなさい。ここで学んだ事は魂へ直接に刻まれ、次の輪廻へ回り転生をした時に無意識下では記憶をしています。下賤な者は排除をし、優秀な者をさらなる高みへ輪廻を廻る。地球。輪廻。伝承。世界は廻って動いてるのです。

さあ。よく考えて学びなさい」

第 1（後書き）

少し変わって、今回はパロディ風味です。

第 2

霧の湖の先には古い洋館がある。未だに風格が残る赤錆びの鉄の門に、壁は赤褐色に酸化している。里に伝わる怪談によると、吸血鬼やら魔女やらが住んでいると言い伝えられている。そして、その言い伝えは 的を得ていた。その くたびれた洋館の中の地下室には魔女のひみつの部屋がある。もっとも、本ばかり置かれているので図書館と言った方が良いのかもしれない。そこに魔女が密かに住んでいた。

「開け異界の扉。我は常世の悪を救う者。
汝、混沌の檻に囚われし弱者。その境界の連環を 我が断ち切る。
狂乱せよ。狂喜せよ。狂愛せよ。―― 我に従え ――」

小さな爆発が図書館に鳴り響き、黒色の光を背負った人型が現れた。その人型は女性のようだ。灰白色の透き通った肌に、血のように赤い髪。暗色の瞳は視点が彷徨っている。彼女を中心とする異形の住人の特有の威圧感が辺りを支配した。

「あの子と同じ呪文を唱えたけれども、同じのが出るはずないか……」

魔女は一人。寂しそうに独語した。

（やっぱり、ご主人様は凄いですね）

私は改めて認識をした。身内の目を除いても魔法の完成度は非常に高い。一つ一つの魔法陣に無駄なく魔力が通るように描かれてい

る。そして、新たに召喚されたモノを見る。どうやら、私と同じく小悪魔のようであった。

「立ちなさい。最後の儀式がまだなの」

黒いグリモワールを取り出して儀式用の短剣でその本を突き刺した。すると、その本は天を裂くような金切り声をあげて荒々しく抵抗をした。

「我が呼びかけに答えよ。汝の新しき名は…… 面倒だから、同じでいいか」

不思議な響きの言葉を呟く。身悶えをしていた本が悲痛な叫び声を上げ、薄暗い光となり小悪魔に吸収されてしまった。そして、魔女は疲れたらしく椅子に座りそのまま寝てしまった。

「《ソロモンの鍵》は読み飽きたから、《黒い雌鷄》を持ってきて」

「はいっ！ ただいまお持ちします。どうぞ」

「どうぞ、じゃなくて何て言うの？」

「えーと、《黒い雌鷄》になります」

「はぁ…… いいわ。ありがとう」

（本をお持ちしましたですよ！ それと、「なります」じゃなくて、「ございます」ですから！）

声にならない叫びをするが、当然の如く二人に届いていない。

「ああ、これは読んだのか。《モーセの第六、第七の書》はあったかしら。無いなら《アルス・ノトリア》でも、いいんだけども」
「えーと、あつても不思議じゃないですよね」

「……調べてきなさい」

「お安いご用です」

「…… 承りました くらいにしなさいね」

いつも働いていたからか、体がどうしても うずく。体が無いなどこんなにも不便な事だなんて思いもしなかった。やきもきしながらその様子を眺めていた。

「気が変わったわ。この本でいい。あなたは掃除でもしてなさい。

この部屋は いいから屋敷を頼むわ」

「お安いご用です」

「承ってね」

「承りました」

そして、私を手にとって図書館を出た。

空は高く透き通り、柔らかい雲の欠片が風に流れる。時代から切り離されてしまったような洋館の中を ぽつりと小悪魔が箒で掃いている。

（やっぱり、お仕事をするのは気分が良いですね）

箒になった私は生まれ変わって初めての仕事をしている。生まれ

変わっても、ご主人様の為に働ける以上の幸せは存在しないだろう。

「なんか、面倒くさいな。サボろうかな。いいよね。悪魔って、堂々と悪いことできるから」

（ちよっと、待ってください！ まだ半分も終わってないですよ！）
「でも、本当にサボったら駄目だね。何かラクな方法はないかな」

悩ましげな表情をしながら、黙々と箒で廊下を掃く。すると、ひらめいたように明るい顔になり再びに図書館へ戻って行った。

数分が経ち、小悪魔はご主人様を連れて廊下へ戻ってきた。ご主人様は急かされるように呪文を唱える。魔法に反応して青白い光の霧が舞い踊り、風を運んでくる。廊下に落ちていた塵や埃が風に飛ばされていった。

「どうですか！ すごいアイディアでしょ？」

「私が疲れるけれどもね。この魔法は掃除に使えるのか。いいわ。あなたに教えてあげる」

「やったー」

ご主人様を働かせるなどんでもない。胸を焦がす憎しみの炎が、あの悪魔を焼き尽くしてしまうのではないかと思えるほどに、私は怒りに震えた。それは、従者として唾棄すべき行為であったからだ。

「それじゃ、この箒はいらないですよね」

無邪気な子供のように言い放ったその言葉に、私の体に衝撃が走った。

（そんなことない！ もっと私を御主人様の傍で働かせて下さい！）

「そうね。あなたの好きにしていいわ」

体から力が抜けていく。雨雲を映しこんだように 私の心は灰色になった。希望の光を失い、意識が虚無の彼方へ飛んで行った。

「それじゃ、お店に売ってきますね。何を買おうかな」
「いってらっしゃい。くれぐれも、外の人にバレないようにね」

原因を作った悪魔を睨みつけた。体があつたなら、血走った眼で睨みつけて、わなわなと体を震わせて今すぐにでも あの悪魔に掴みかかってやろうと思ったくらいだ。

第 3

あの悪魔に売られてから幾年が過ぎた。今は森の中の店の商品として陳列されている。ここは、ご主人様に教えてもらった魔法の道具の専門の店だ。時折 ご主人様と魔法書などを一緒に買いに来ていた思い出がある。店主が暇そうに本を読んでいると、来店を知らせるベルが店に鳴り響いた。

「おじさん。元気にしてる？」

少しユルい癖のある金髪のショートカットで、赤いワンピースを着た女の子が、今日も来店してきた。

「お兄さんだ。また、君か。魔法は君には売らないよ」

「どうして？」

「君の体は魔法を使うには弱いからな。せめて、その年で男の子だったなら話は別だが」

「男の子なんだぜ」

「すぐにバレる嘘をつくな。どうしても、魔法を使いたがるんだ」

「お父さんに楽をさせたいから」

「魔法以外に手段があるだろう。物騒なんだぞ魔法は」

私は店主の言葉に頷く。魔法は強い力を秘めている半面に反動も大きい。そのために生け贄などを用いたりするのだ。生け贄のない魔法は魔法使いの魂を喰らう。半日も寝ていれば良くなるものもあるが、場合によっては寿命を縮める魔法もあるのだ。

無邪気な心に満たされた 無垢な瞳が店主に言い返した。

「だって、カッコいいんだもん！」

とても懐かしい既視感に襲われた。思いだした――。初めて会った時のご主人様も同じような事を言っていた。なぜ、悪魔術を使うのか。従わせるだけなら精霊術や、天使術の方が遥かに楽だ。そう私が問いた時の言葉を甦えらせた。

（だって、凄そうでしょ？ 悪魔とか。強そうなもの）

いつにも増して、無邪気な瞳で熱弁していた。この子も同じなんだ。ただ、ご主人様は夢を描いていて、その落書きの夢が実現しただけ。この子は、その落書きを描いている最中なんだ。

でも、私たちの世界には入ってはいけない。どんな魔法でも基本的には魂を喰らうものだ。店主が男の子だったらと言ったのは、どうにもならない理由を突き付けて諦めさせるためだろう。

「かつこいいって、具体的には何がかつこいいんだい。他でもカッコいい事はいっぱいあるぞ」
「ほら、これを見てよ」

子供が絵本を取り出して、意気揚々に内容を話し出した。その話には聞き覚えはなかったが、すぐに話の内容が分かった。その絵本は、湖の先の館に住む魔女の話だったからだ。

魔女は黒魔術を使っていて里から気味悪がれていた。ある日、里が日照り続きで大変な時に、黒い従者と一緒に雨雲を作って飛んで帰って行った話だ。

（思い出しました。ここの店主が怪我をして、代わりに買い出へ行った時ですね。里が暑かったから、雨雲の日除けを作った事でしょ

うか)

「魔女の服は作れるから、黒い従者と魔法が必要なんだ」

「だから、男の子じゃないと駄目だぞ」

「必要なんだぜ」

(その 黒い従者が、ここに いますけれどもね)

この子供が店を毎日のように訪ね、数え始めて七ヶ月にもなる。今日も かたくなに魔法を要求する子供に、店主はついに匙を投げた。

「分かった。だけれども、君の絵本の魔法使いの魔法じゃないけれどもいいかい」

待っていたとばかりに子供の目が爛々と輝いた。店主は店の奥に行き、一冊の本を子供に手渡した。見たことが無い本に 私も興味が移った。

「最近になつて発達した魔法だ。魔女も来なくなつたことだし、ここに眠らせるの勿体ないからな」

「どんな魔法なんだぜ」

「別に口調を変えても…… まあいい。話すぞ。これは科学魔法の本なんだ」

「どんな魔法が使えるんだぜ」

「その口調が煩わしいのだが、話を進めるぞ。そうだな。花火を見たことがあるかい。簡単に言うと、材料を集めて花火を作ったりする魔法なんだ。魔法の力が無くても使える魔法。ただし、魔法という名がついてるから、多少の魂の消耗はするけれどもな」

初めて聞いた魔法に子供だけでなく、私も聞き入るように店主の

説明に耳をすませる。簡単にまとめると自然現象を工夫して使う魔法のようだ。

「ご主人様は何もない所から自分の魂を使って、異界のチカラを呼び出す魔法に対して、この魔法は最初からあるものを加工して魔法を生み出す魔術だ。確かに体に優しい この子向けの魔法かもしれない。」

「ただし、期限をつけるぞ。一週間以内に、ここにある魔法のうち一つを覚えること。それができなかつたら、この本をあげないからな」

「ええー！ なんで？」

「才能のない奴にあげたくないからな。君が成功したら売り物をタダでやるんだ。文句を言われる筋合いは、全くないからな」

「分かった。その本を頂戴」

「持ち逃げすると駄目だから、ここに読みに来なさい」

「ちえっ 分かった」

口では拗ねたように言いながら、爛々と輝いた目が興味を語っていた。

「魔法を使うのに必要な物があつたら言うんだぞ。壊さない限り貸してやるさ」

「ん」

店主の好意を聞き流して子供は食い入るように魔法の本を見る。そして、おもむろに私を手にとって外の世界へ連れ出した。

第 4

空は一点の曇りもない快晴だ。木々の緑が光を重ねて、透き通った光が私達を優しく撫でる。古びた店主の小屋の近くに箒を持った少女がいた。

「やっぱり、魔法だから空を飛びたいよね！」

（普通の人は そう考えるのですね）

いつも図書館にいたので、空を飛びたいと思った事はなかった。私の背中には羽が付いていて空を飛んで遊覧飛行だってできた。しかし、それよりもご主人様と過ごしたほうが楽しかったからだろうか。

私を跨いで目をつぶって力を込めるが、石のようにピクリとも動く気配はなかった。

「おかしいなあ。多分、合っていると思うけれども どうだろう」

（瞑想せずに、飛ぶのはご主人様でも難しいですよ。基本をちゃんと教えてもらえば良いのですが……）

「なあ、おじさん！ この魔法は嘘っぱちだろ。できないじゃん！」
「これでもか？」

店主は店にあつた箒に跨いで宙に浮いた。それを見た子供はぐうの音も出ずに、黙って店主を睨みつける。

「出来ないなんて、ただの言い訳だろ。努力も才能も足りない証拠だ。諦めるんだな」

「うるさい！ できるもん！」

魔法の基礎すら勉強していない子供に実技試験は不可能だ。そこで気がついた。あの店主はこの子に魔法を教える気など全くない。努力をさせて絶望させて無理矢理に諦めさせる魂胆だろう。

悪魔のような方法だが、これもあの子の為だ。本当にあの子の事を思って正しい道を導いてやろうとしている。店主の心境は、きつとあの子には、まだ分からないのだろう。

店主からの課題が出されてから四日経った。店主の小屋から少し距離を置いた、灰を被ったように埃まみれの小屋の近くで彼女は練習をしている。この小屋は彼女の秘密基地のような隠れ家なのだろうか。

（懐かしいですね。湖の洋館を見つけて、地下室を作る前までは、ここに住んでいましたね）

「ああー！！ できないっっ！！」

（諦めるのも、時間の問題でしょうね）

どんなに頑張っても、この四日間で進歩が全く見られない。子供は苛立ちを、かん癪に変えて、近くにあった小石を思いっきり蹴り飛ばした。そして、私を投げ捨てて不貞寝をするように、ごろりと草の上に倒れこんだ。

（おや、やはり諦めたのでしょうか）

私は子供をじつと見つめる。頑なに瞳を閉じて、逃避するように見えた。日が昇っている間中は、ずっと練習を重ねていたのだ。それでも全く進歩が見られないならば、見限ってしまうのは当たり前だろう。

小一時間程度が経っただろうか。子供は、勢いをつけて跳ね起きてむんずと私をつかんだ。

「次に同じくらい 良いチャンスが来るまで 私は待つてられるか？ 気が短いから絶対に無理だな」

ぼつりと自分に言い聞かせるように呟いた。深呼吸をしながら瞳を瞑る。

「頑張ってるから苦しいんだ。当たり前のことだから……」

ぎゅっと私が握られる。私から草木のざわめきの音が徐々に奪われる。緑の香りも立ち消える。世界の色がセピア色になっていき、私と この子 だけになったような気がした。

「私が握っているのは筭じゃない。私の人生だからッ！！！」

距離にして一センチも満たない程度。 少しでも宙に浮かぶことができた。

この子 は狂ったように はしゃいだ。体に弾ける喜びの渦を体全体で表現しているかのようだった。歡喜の涙を流し、見ているこっちが恥ずかしくなるほどに 激しく跳ね回っている。

私の最初のご主人様も初めて魔法を使えた時は、もしかしたらこの子と同じくらいに喜んでいたのだろうか。姿が重なって見えたとような気がした。

喜びの勢いに任せて、この子は店主へ報告に行った。

「ねえ、おじさん！ 飛べたよ！ 飛べたんだよー！」

この子 は店主の前で私に跨いで、再び飛ばうとするが飛べなかった。

「えっ！ なんで、どうして!？」

「偶然だろ。期限はあと三日だ。それと、試験課題は 宙に浮かぶことじゃなくて 空を飛ぶことだ。あそこの 紫色の柳の木から、この小屋の前にいる 僕の元まで飛べるように。一週間も時間を貰っても できないなら諦めるんだな」

「え、だって……」

「どうした。何なら今すぐにでも 試験を中止にしてもいいんだぞ」

この子の瞳が曇った水晶のように濁り、光を失ってしまった。とぼとぼと、操り人形のように力無く 隠れ家に帰って行った。

第 5

この子の影が徐々に夕闇に溶けて消えていく。あれから何度も飛ぶ練習をしたが一向に飛べない。浮遊したことすら片手で数えることができる程度だった。沈む太陽を名残惜しそうに見つめて家路へ向かう。

「やっぱり、偶然だったのかな……」

薄暗く焼けた空を背に 一人でぽつぽつと歩く。この子の頑張りは、きつと私がよく知っているだろう。だからこそ、この子に かける声が見つからなかった。

今日は霧がかった曇り空が広がっている。太陽の见えない空は、この子の立ちはだかる不安を表しているようにも見えた。

午前中は調子が出ずに浮遊すらできず、昼食の為に家へ帰り、再度隠れ家に向かう。それから数時間が経過しても 一向に上達の兆しが見えなかった。

「本当に できるのかな……」

風が吹けば消えてしまうような弱々しい声。この子はあと二日で空を飛ばなくてはならない。魔法の世界に入って欲しくはないのだ

が、この情景を助けてやりたいと思わないほど私の心は冷たくはない。今まで我慢していた気持ちが私を駆りたてて 必死に、この子に声援を送っていた。

（魔法の本を手を取った時に何を選んだんですか！？ 空を飛びたかったんでしょ！ 最初の心を思い出してください！ あきらめちゃ駄目です！）

この子は念じるように瞳を瞑った。すると、一瞬だけ浮遊するこ
とができたがすぐに地に落ちた。

（浮いたのならもう少しです！ 浮くのではなくて、進むのです！
体を風に流す感覚で頑張ってください！）

「あつ！ 分かった！！ 斜め前に飛ぶようにするんだ！ 上に浮く
くんじゃなくて進めるようにしないと」

私の祈りが通じたのか、今度は浮く練習でなく飛ぶ練習を始めた。
しかし、まったく進みはしなかった。それどころか、安定して浮遊
すらできないのだ。この子は、進展しない苛立ちを私に向かってぶ
つけてきた。私を地面に強く叩きつける。

（何の為にここまで頑張ったのですか！？ あなたの夢は苛立ちな
んかに流されていいんですか！ かん癪をする暇があったら前に進
みなさい！ 感情なんか浸っている暇はないんですよッ！）

「はあ…… 今日の頭の中にいる私は手ごわいなッ！ …………… よ
っし！ 悪い感情はやつつけたッ！ いくよッッッ！」

一回、二回、三回と試みる。一回目は浮遊はできたが進まずに失
敗してしまった。二回目は少しだけ前に進めたが、風に流されて地

に足が着いてしまう。三回目は浮遊すら出来ずに失敗してしまった。四回目は前に進もうとしたが風にクルリと回されてしまった。

（頑張つて！ 私が最後まで応援します！ 私があなたの努力を認めます！ 絶対に忘れません！ だから、一人じゃありません！ 頑張つて！）

気がつく、この子の瞳には涙が溜まっていた。それをゴシゴシと拭って、凜とした顔つきになる。

「誰か ができたことだから、必ず人間でもできる事だ。不可能じゃない。一度失敗して、二度目も失敗しても、三度目も失敗しても、四度目こそ思っても失敗しちゃう。でも、失敗の仕方が全部違ってくる、成功してるんだ。理屈じゃない。今は、やるしか無いからッッ！」

この子は私に 魂を込めてギュッと握った。私の体に、この子の励起された魂が全身に流れ込み奔流が渦巻く。世界が連鎖反応をして、今にも弾けんばかりの魔力が私に駆け廻った――！

「でも、飛べないのかあ。気持ちだけじゃ無理だよね……」

ため息を 溜まった疲れごと吐き出すように深くついた。

「もうちょつとな気がする。まだ、頑張らなくちゃいけなくて あゝッッッ！！！」

私の中に駆け巡った魔力が噴出して、この子を森の奥へ投げ飛ば

した。距離にして十五メートル程度だろうか。この子は空を飛ぶことができたのだ。

雲の切れ間から光が差し込んだ。空にかけられた燐光のカーテンが、讚えるように美しく煌めいた。

第 6 『最終章』

いよいよ試験の日になった。雲ひとつない透き通った空。降り注ぐまばゆい光を浴びた鳥達の唱歌が、生い茂る若草の影から奏でられる。風も強くなく、絶好の試験日和である。私たちは紫柳の木の上から店主を見下ろした。

「ふあっ——、はっつ——あ！」

緊張のあまりに過呼吸状態になっている。よく耳を澄ませると、歯が軋るような音も聞こえてきた。いつものような軽やかな姿はなく、プレッシャーに飲み込まれているようだ。

（落ち着いてください。いつもの通りにやれば、きっとできます！）
「今日の心の中にいる悪い私は、いつもよりも手ごわいな……」

不安に今にもつぶされそうな声でぽつりと呟いた。

（大丈夫です！ 私が憑いています！ 気をしっかり！）

緊張で強く手が握られたせいか、手が痺れていたようだ。軽く利き手の右手を振って慣らし、次に左手を振ろうとする。すると、左手に持っていた私に気がついたように、ぽかんと見つめた。すると、緊張していた糸が解けたように、この子の表情が柔らかくなった。

「頼りにしてるよ。相棒さん」

（従者でなくて、相棒ですか。少しくすぐったいですね）

この子は 再び紫柳の木の上から目的地を眺める。獲物を見つけた肉食動物のように店主を睨みつけて見下ろした。

大きく息を吸って、世界の魔力をかき集める。大きく息を吐いて、体の緊張を外に投げ捨てた。瞳を閉じて世界を見渡す。風の魔力を味方につけて、魂と混ぜ合わせる。私に大きな力が駆け巡った。

魔力と魂が炸裂した咆哮とともに、この子は空を翔けた――。

弾けた魔力で木の上から放り出されるように飛び立った。この子は、そのままの勢いで緑の大地に墜落しそうになったが、その勢いを殺さずに上昇をした。

（正解ですね。高い所にいれば、より 風が強く吹きます。無理をせずに低空飛行で十分です。距離も短いので、最初の勢いで走り抜けたら 私達の勝ちです！）

そのままの勢いで、少し上昇をして調節をする。そして、さらに加速をしていった。慣れない飛行と、加速によって酷い振動が感じられる。左右に揺れ動きながら、この子の眼光は、より鋭さを増して店主に焦点を合わせていた。

（向こうの右の木が、風で強く揺れました。強い横風が来ます！）
「右側か。魔力を弾かせて、押し切ってやる！」

力任せに店主の元へと空を翔ける。横風からの襲撃にも失速せずに強引に突っ切った。加速によってさらに上下左右に乱れるが、まだ走れる。構わずに加速を強めた。

「―― 今度は左側。左の木を見損なったのかな」

私も注意を払っていたが、左側の木が揺れていたことに気がつか

なかった。二人とも手落ちをしてしまうなんてあるのだろうか。私は周囲を見ていたし、この子も抜からずに気を配っていた。

再び、風が私たちを横に難いだ。今度も見えなかった方向だ。傾いたバランスを無視し、加速で誤魔化して翔け走った。

（なんだか、風の流れが おかしいですね）

「なんだか、風の向きが変みたいだね」

よく観察してみると、木々が店主の小屋を回りこむように囲んでいる事が分かった。風が吹くと、木々を沿ってあらぬ方向に吹きつけてくる。

この子もそれに気がついたようで、風に乱れた木々の光景に 頬をひくつかせたように感じた。

「相棒さん、えらく 神様に好かれている試練っぽいね」

（全くです。不条理な偶然ですね）

背後から、大きな見えない手で押されるような強風に叩かれた。本来は絶好のチャンスだが、吹き抜けた風の先の木々が乱雑に傾く。緊張が走る。この強風が違う方向へ吹きつけたなら、間違いなく流されるだろう。

（勝負を賭けましょう！）

「いけっえええ！」

店主に向かって渾身の全速力で弾けた。すると、先ほどの風が正面へ回りこんで襲いかかる。強風に煽られて、きりもみをしながら店主の元へ翔け抜ける。店主は驚き、避けるように横へ跳んだ。

（そこですッ！）

「逃げるな！ そりアツツッ！！」

全身全霊を賭けて、店主に猛烈な体当たりをした。

「どんなも……ん……だぜ」

「いや、口調はもういいから」

私達は「店主の元」へ飛びました。最後の店主の奇行にも負けずに、無事に辿り着くことができた。

「ゴールがよけたらダメでしょ。卑怯だよ……んぜ」

「あれは、無いだろう。それに、もう 男の子はいいんだが……」
「くくく。ほら、約束通りに辿り着いたぜ」

嫌味を覗かせながら、さも当たり前のように、自信たっぷりに胸を張っていた。太陽と星屑を混ぜたような明るい輝きをした笑顔を私達へ咲かせた。

数年前の出来事に思いを馳せる。店主も認める一人前の魔術師になった彼女は、いつもの秘密の小屋に住んで 魔法の研究をしている。

「お天道サマが出ないと思ったら、今日も外が曇ってるのか。霧付きだし」

肩までの長さになった 太陽のような黄金色の髪が風に揺れる。風は霧のせいで湿っていて、彼女の毛癖に拍車をかけた。髪のせいか、どこことなく口調が尖っているように聞こえた。

ここ数日間。暖かい日差し of 青空を見ていない。不審に思ったのか、小屋に戻ってガラス玉を取り出して魔力を送った。すると、ガラス玉は鮮血を被ったように赤く変色をした。

「誰かが弄ってるみたい。魔法の媒体は血。しかも、悪魔の加護つき。黒魔術師がやっているのかな。ところ構わずに、魔力を吸い取ってどこかに送っている。霧の湖の方向かな」

悪魔。黒魔術師。霧の湖。もはや、キーワードは揃っている。

「草木も元気がないし、魔力の無い人からは 活力を奪うみたい」

ガラス玉を空に透かして 冷静に分析をしていく。

「つまり、これを止めたら 正義の英雄ってワケだね。――
霧の湖の館に住む 魔女みたいに」

小屋に帰り、黒と紫色を基調にした いかにも魔女のような怪しいローブを纏う。もちろん、店主からもらった お気に入り of 黒いとんがり帽子もセットだ。

魔力切れをしないように霊薬を準備し、他にも使えそうな魔道具を腰に提げる。腰に下げた霊薬の缶と精霊のランプがぶつかり合い、カランと音を響かせた。

手慣れた様子で、懐から取り出した楕円の水晶を中心に地面に星型を重ねた魔法陣を描く。

魔力を送られた　ぐにやりと曲がった短剣で、楯円の水晶を突き刺した。小さな爆発を起こし、粉のように破碎された水晶を中心として、辺り一帯の魔力が魔法陣に吸い込まれるように集まる。手がかざすと　纏うように魔力が体に張り付いた。

――　準備は万端だ。

「頼りにしてるぜ。相棒さん」
（お任せください。相棒さん）

この先の楽しみを抱きしめながら、私達は霧の向こうへ飛び立った――。

第 6 章 『最終章』（後書き）

End

めん棒 1

怖くなるほどに、静けさが満ち溢れている深夜。ぽつりと一画だけ光っている台所で、青年が一人だけ立っていた。その青年は虚空に両腕を突き出して、手を握っては開いてを繰り返している。

「そろそろ、手が温まったかな」

強力粉と薄力粉を混ぜて、ドライイーストを加える。塩、砂糖、スキムミルク、卵を お湯で溶かして、ボールに入れて混ぜる。べたつかなくなったら、多めにバターを入れてさらにこねて、叩いて綺麗にまるめる。青年はパンを作っていた。

「お願いだから、ちゃんと働いてくれよ」

発酵させるために、オーブレンジの発酵機能を使う。家庭用のオーブンは、保温性が良くない。少しでも高め温度の三十五度で、六十分ほど発酵させるように設定する。

パンをオーブレンジに入れた時に、大きな一息が漏れた。慣れたのだから疲れている訳ではないが、力仕事には変わりはない。ここで、一時間ほどの暇で手持無沙汰になる。いつもなら、ネットでパンのページを見て時間を潰しているのだが、重たそうな瞳が頭を起動させることを拒んでいるようだった。

「寝ようかな。発酵が終わればオーブンの音で分かるし」

椅子に どころと体を投げるように座る。眠気に体を預けると、意識が遠くなっていた。

ふわりとした浮遊感に包まれる。真っ暗なその世界は、死者の世界を連想させるようで 寂しく感じられた。

その虚無の空間に、二人の人間が立っている様子が見えた。ひとり、小さめの背丈に、紫と緑を中心とした長いスカートのような独特の服を着ており、手には青い板切れを持っている。もうひとり、淡い黄色い光に包まれていて、かろうじて人型だと分かった程度だった。

光っていない方の人から、どこことなく 畏怖の念を感じてしまった。見ていると 背筋が凍りつくように寒気がする。

黄色い光の人が頷いて、光って無い人へ会釈をした。すると、黄色い光が 暗闇の中へ溶けてしまった。

珍妙な光景に瞳を奪われていると、光っていない人が こちらを見た。怒ったように、両肩を広げるように小走りでこちらに近づいて来た。

本能的な危機を感じたのか、頭よりも先に体が逃げてしまった。恐怖に駆られて、走れる限りはどこまでも走った。そのまま走り続けていると、浮遊感が徐々に無くなって、視界が明るくなっていった。

小気味良い音を立てて、めん棒がフローリングの板に落ちた。そ

の音を聞いて、心臓が竦み上がったように跳ねて、驚きのあまりに飛び起きた。

額の汗を拭う。まだ、心臓が驚いている。不思議な夢を見た。怖い人に追いかけられる夢なんて寝心地が悪い。あまりにも怖い印象しか残っていないので、夢占いで調べてみようかと思ったくらいだった。

悪寒を被うように、チンとオーブンレンジが時間を知らせる。開いてみると、あまり膨らんでいなかった。今日のオーブンレンジは、調子が悪いらしい。設定温度を四十度に上げて、十分ほど追加をする。

指を閉じて開いてを繰り返して手を温める。チンと音がして、オーブンレンジを覗くと、丁度良い大きさに膨らんでいた。

生地を九つに切って、一つずつまるめていく。まるめた生地に、ソーセージ、ポテト、イチゴジャム、ピーナツクリームを入れてまるめ直す。

これでテーブルロールの完成が見えてきた。あとは寝かせて焼くだけだ。明日の朝を楽しみに、心を弾ませながらパンに霧吹きで水をかける。硬く絞った布でパンを包んで乾燥させないようにする。これを怠ると皮が異様に硬いパンが出来てしまうので、慎重に作業をする。

再びオーブンレンジに発酵をしてもらう。調子が悪いようなので、今度は四十度にして六十分の発酵に設定する。

「よっし。寝たから元気が猛烈に戻って来た！ それじゃ、ネットで適当にぶらついてこようかな」

しんと静けさに占領された居間の電気を点ける。家族で共用のパソコンを開いて、お気に入りからパン作りのブログを見る。丁度に自分と同じ時期にパン作りを始めた人のブログだ。

自分もずっと昔に この人のススめブログに挑戦してみたが、あまり人気が集まらなかった。もっと、文章を柔らかく。もっと、色を煌びやかにする。もっと、自己紹介でアピールする。もっと、他の人のブログに書きこんでブログを書いている事をアピールする。何度か訪問してくれて注意を書きこんでくれたが、逆に会うたびに注意されているようで嫌になって、適当な理由をつけて止めてしまった。

正直に言つて、そんなにブログを弄っている時間があつたなら、パンを作ったり、ほかのことをしたほうがよほど有意義な気がする。侮蔑しながらブログを見るが、そのブログを律儀に毎日 見ている自分がいて、ほとほとに呆れる。もしかしたら、綺麗なブログを作れることが羨ましく感じている 裏返しなのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776q/>

物生の輪廻

2011年11月12日01時31分発行